

阿多野用水文化財調査報告書【概要版】

1. 阿多野用水とは

阿多野用水は、阿多野原と呼ばれた台地に新田を拓くためにつくられた江戸時代の農業用水路です。用水路の総延長は 10.8km であり、このうち隧道は 1,488.32m を占めます。水源である布引滝から引き込まれた用水は、大御神に所在する阿多野用水池の堤にせき止められ、水門を通じて隧道内に引き込まれ、棚頭の地下を通り、阿多野まで流れています。

水稻栽培のほか、明治時代には、阿多野で用水を利用した水掛け菜（水菜）栽培がはじまり、現在では小山町の特産品として多くの人々に食されています。阿多野用水は、元禄の大地震や宝永の大噴火、台風など、度重なる自然災害による被害を受けながら、その度に地域の人々によって修繕が繰り返され、約 350 年間、利用され続けています。

阿多野用水略年表

時代	年号	阿多野用水に関する主な出来事
江戸時代	寛文4年(1664)	江戸京橋「すみや」宇右衛門と湯舟村名主喜平次が阿多野の新田開発願い状を小田原藩に提出。工事は実現せず。
	寛文8年(1668)	江戸材木町石屋喜多善左衛門と湯船村名主池谷市左衛門が開発願い状を小田原藩に提出し、開発が認可。
	寛文10年(1670)	総距離 5.981 間（約 10.765 km）のうち隧道 453 間（約 823m）の用水路がほぼ完成。
	元禄16年(1703)	元禄大地震が発生。水路の上流およそ 1,328 間のうち 300 間（約 545m）が崩落。
	宝永2年(1705)	棚頭村内の地底を南北に 631 間（約 1,147m）ほど隧道を掘り進める大工事を実施。
	宝永4年(1707)	工事が完了。11 月 23 日に宝永山が噴火し、阿多野新田の田畑・用水路は厚さ 1m 以上の砂に埋もれる。
	享保元年(1716)	困窮する村々の再三にわたる訴えの結果、幕府による田畑の砂除けと砂を水で流す用水堰工事の援助が決定。
～阿多野用水の復旧工事 溜井や取水口の砂を押し流す工事を開始、現在の姿に～		
明治時代	明治年間	阿多野に水掛け菜（水菜）栽培が伝来。
大正時代	大正元年(1912)	須川発電所の建設に伴い、阿多野調整池が造成。
	大正12年(1923)	9月1日、関東大震災が発生。阿多野用水の水門が破壊。水門は同年12月23日に復旧。
	大正13年(1924)	1月15日の余震で水門は再度崩壊。国、県、村の補助を受け、5月12日に復旧。
昭和時代	昭和4年(1929)	水門復旧を伝える水神碑が阿多野の天神社境内に建立。
	昭和52年(1977)	水量、水質確保のための工事着手。水路整備と斜面補強、開渠部への床版設置を実施。
	昭和59年(1984)	簡易雑排水処理施設と毛管浸潤トレンチの設置。
平成時代	平成11年(1999)	水量、水質確保のための工事完了。
	平成22年(2010)	9月8日の台風9号により、阿多野用水池は土砂が堆積し、堤防が2箇所決壊。阿多野用水池の池底が流失。布引滝から阿多野用水池をつなぐ取水路が土砂で埋まる。
	平成23年(2011)	2月から12月にかけて、農業用施設の災害復旧工事を実施。阿多野用水池の東面に重力式コンクリートダム（本提）、南西面に均一型フィルムタイプダム（副提）を設置。12月3日に工事完了を記念し「阿多野用水通水式」を実施。



隧道壁面の文字



隧道内の様子



阿多野用水池



水門